

平成十五年度 収藏品展 身のまわりの生活史

記録スル。楽シム。

会期 7月26日 ~ 10月26日 マテ
月曜休館・祝祭日直後ノ平日
(9/29 ~ 10/2 館内薫蒸作業ノ為 休館)

開館時間 9:30 ~ 16:30
南埼玉郡宮代町西原289
☎ 0480-34-8882 Fax 0480-32-5601

宮代町郷土資料館

<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>

Eメール museum@town-miyashiro.saitama.jp

開催にあたって

平成5年11月に資料館が開館してから、もうすぐ10年を迎えようとしています。この間、多くの方々からさまざまな資料が寄せられました。農業や手工業などに関する道具類、家庭において使用されてきた食器類や衣類などの生活に密着したもの、学校で使われたり好んで読まれた書籍類など、実に多岐にわたる資料を収蔵することができました。これらの資料の中から、あるテーマのもとに展示をおこなうのが、「収蔵品展」になります。



今回の収蔵品展では、「身のまわりの生活史」というテーマのもと、特に「記録する」ことに注目し展示を行いました。今でこそなにげなく使用しているCDやカメラ、パソコンなども、これらが開発されてくるまでには、いくつもの製品が作られ、改良されあるいは全く違った視点を持ちながら開発が行われてきました。これらを生み出した技術の進歩を、収蔵品を通して見てみようというのが今回の展示になります。できるかぎり、時代順に見ていただけるように試みましたが、収蔵品だけでは不足する部分も多々あります。これらについては、今後の収集により補うことができるよう努めさせていただきます。

私たちの身のまわりは、日々変化しつづけています。今後も、皆様のご協力を仰ぎながら、少しでも多くの「身近な歴史」を後世に伝えていけるように務めたいと存じます。

最後になりましたが、これまでに資料をご恵贈くださいました方々に、心からの感謝とお礼を申し上げます。

平成15年7月 宮代町郷土資料館

凡例

- 1) 本書は平成15年7月26日から平成15年10月26日にかけて開催する宮代町郷土資料館収蔵品展 - 身のまわりの生活史 - 「記録スル。楽シム。」の展示解説書です。
- 2) 本書並びに展示した写真は一部の資料を除き長谷川弘樹が撮影しました。
また、本書内イラストは「平凡社 世界大百科事典」を参考に資料館職員が協力して製作致しました。
- 3) 本展示の企画構成並びに本書の執筆は横内美穂・諏佐勝樹が行い、編集は長谷川弘樹が行いました。また、展示は資料館職員等が協力し行いました。
- 4) 資料提供・協力者一覧（敬称略・五十音順）
新井尚 大塚満治 岡崎邦雄 小河原進 折原一 島村正次 田部井理一朗 中村忠男
並木勇 山本幸吉 吉岡郁子 渡辺恵司 渡辺研二 シルバー精工株式会社 (株) マミヤ

展示品リスト

	品名	年代	寄贈者
1	錦絵「東都地名づくし」(増位山大四郎)	明治時代	渡辺 恵司
2	錦絵「東都地名づくし」(因州勝山芳蔵)	明治時代	渡辺 恵司
3	ガラス湿版写真	大正時代	小河原 進
4	カメラ箱	昭和時代	渡辺 恵司
5	カメラ (RICOH FLEX)	1965年発売	渡辺 恵司
6	カメラ (セミ・ミノルタII 8型)	1942年発売	渡辺 恵司
7	カメラ (JIFFY KODAK)	1935年発売	渡辺 恵司
8	フラッシュ	昭和時代	渡辺 恵司
9	露光計	昭和時代	渡辺 恵司
10	双眼鏡	昭和時代	渡辺 恵司
11	カメラ (BEAUTYCORD)	1955年発売	大塚 満治
12	カメラ (Yasicaflex)	1957年発売	折原 一
13	カメラ (Pax M3)	1960年発売	吉岡 郁子
14	カメラ (F P K O N I C A)	1962年発売	並木 勇
15	カメラ (AutoHalf SE)	1967年発売	吉岡 郁子
16	カメラ (HI-MATIC AF2)	1981年発売	吉岡 郁子
17	8ミリカメラ (MAMIYA8JE)	1958年発売	並木 勇
18	8ミリカメラ (Single-8 P1)	1965年発売	並木 勇
19	蓄音機	1930年代	渡辺 恵司
20	蓄音機	1930年代	新井 尚
21	レコードケース及びレコード	1930年代	渡辺 恵司
22	蓄音機用レコード (SP 盤)	1930年代	田部井 理一郎
23	レコード (EP 盤)	昭和時代	新井 尚
24	謄写版	昭和時代	山本 幸吉
25	謄写版やすり	昭和時代	山本 幸吉
26	鉄筆セット	昭和時代	中村 忠男
27	タイプライター	昭和時代	大塚 満治
28	ワープロ (東芝ルポ J W - F 3 0 0)	1995年発売	宮代町郷土資料館
29	ちらし (杉戸農業農産物品評会)	昭和時代	小河原 進
30	寄宿舎入舎心得	昭和時代	小河原 進
31	選挙広報	昭和30年2月	島村 正次
32	選挙結果報告について	昭和30年3月	島村 正次

撮影スル。

今から約150年も前の日本では、風景や人物の様子を伝える方法は、文章で表現するか模写により伝えるしかありませんでした。特に目で見て理解できるようにするためには、絵巻物のように直接絵を描いたり、浮世絵のように版木に彫り付けて刷り、それを見ることで実際に想像するしか方法がありませんでした。

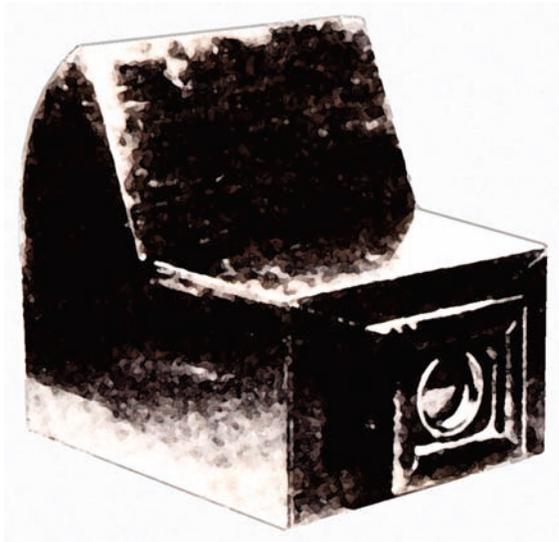
1839年にフランスで発明された写真は、風景や人物の様子などの「ある瞬間の様子」を切り取り、複製することのできる画期的な技術でした。日本にこの「写真」という技術が入ってきたのは1840年代（江戸時代の終わりごろ）のことで、当時はまだ財力のある者や蘭学者らんがくしゃなどのごく一部の人が知るのみでした。また、写真を扱うには多年の修練と科学技術の素養を必要としたことから、一般の人々が手軽に写真を扱うことはできませんでした。

このように明治時代の初めごろには高価で貴重なものであった「写真」も、写実性の高さが好まれ、だんだんと一般の人々にも広まっていきました。また、器材や必要な薬品などが工業製品として安定した供給が行われるようになり、その技術が次第に容易なものへと改良されていくにつれ、身近なものとなってきました。

写真の技術は、その後、動画としての「映画」を生み出しました。連続した何枚もの写真を高速で投影することにより、動画として画像を見ることのできるこの技術は、8mmカメラという一般向けの動画記録媒体ぼいたいを生み出し、子どもの成長やイベントなどの記録を、簡単に残すことができるようになったのです。

現在では、デジタルカメラ・デジタルビデオカメラなどの新しい技術も身近なものになりました。このように、写真の発明から現在にいたるまで、わずか150年ぐらいしか過ぎていないというのに、今の私たちは高度で複雑な技術を容易に扱えるようになってきているのです。

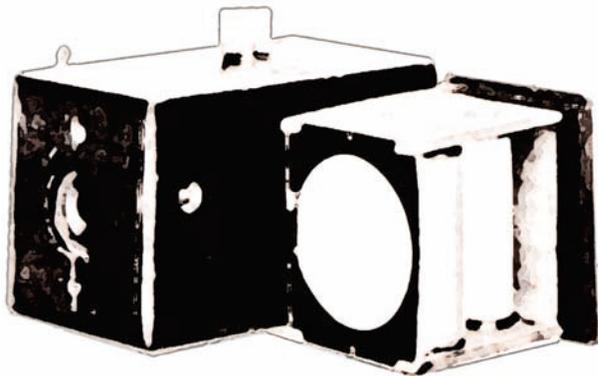




←携帯用カメラ カメラ・オブスキュラ (1665年)

小さな穴から暗い部屋に差し込んだ外部の光が、障子や壁に像を映し出すことは経験されたことがあると思います。この現象を利用し、木箱に凸レンズ、反射鏡、すりガラスを装置した一種の受像器をカメラ・オブスキュラ (*camera obscura*) といいます。今日のカメラの起源とも言えるものですが、一般的にその始まりは、ナポリの物理学者バプティスタ・ポルタが初めて作ったと伝えられています。この時代のもは部屋全体がカメラという大きな装置でしたが、ドイツ人のツァーンによりイラストにあるような携帯用の小形の物が工夫され、小さい穴のかわりに凸レンズを取り付け、これに紙をあてて映像のトレースがおこなわれました。

カメラ・オブスキュラはラテン語で、カメラは『部屋』を、オブスキュラは『暗い』を意味しており、日本でも『やみばこ』などと呼ばれていました。今の『カメラ』はカメラ・オブスキュラが簡略化された名称なのです。



←最初のコダックカメラ (1888年)

昔のカメラは、基本的に一枚ずつ交換しながら撮影されていました。そこに革命を起こしたのが、ロールフィルムの発明でした。

1884年、イーストマンはアメリカンフィルムとよぶロールフィルムを作り、1888年にこれを使ったボックスカメラ『コダック』を発表しました。フィルム込みで発売され、撮影がすんだらカメラごと専用工場に送れば写真に仕上げしてくれる仕組みでした。この時の有名なキャッチフレーズ<You press the button, we do the rest>(あなたはボタンを押すだけ、あとは私達の手で)のとおりに、軽量であり簡単だったことは、写真というものを一般人達へ広めることに成功したのです。

現在では、デジタルカメラの普及などにより個人でのプリントも可能となりましたが、それでも100年以上前に始まったシステムが今も生き続けているのです。



↑ミノルタ セミミノルタII 8型 (1942年)

初期型の発売は1937年(昭和12年)の12月、細部に改良を重ねられながら1943年まで発売されていました。当時は第二次世界大戦の只中にあり、戦況の悪化によって生じた物資の不足、工場の接収などにより生産停止を余儀なくされたと思われます。展示品は1942年に発売されたモデルで、そのレンズは戦争の風景さえ映し出してきたことでしょう。



↑リコー オートハーフ SE (1967年)

1960年代に発売され爆発的にヒットしたのが、このリコーオートハーフです。ゼンマイを使用した自動巻き上げ機能をもつハーフサイズ機で、操作が簡単でありながら本格的なレンズによって鮮鋭な描写ができました。また外装のデザインが豊富で、結婚披露宴の引出物に使われる個人パターンさえあったと言われていました。外見と簡単さを兼ね備えていたため、女性にも人気の高いカメラでした。

録音スル。

声や音楽を聞く。今の私たちは様々な機械を使用して、思ったときに気軽に楽しむことができる環境にあります。CDやMD、カセットテープなどに記録された音楽は、それを聞く環境にもよりますが、演奏された当時の臨場感あふれる状態で楽しむことができます。

今から100年ほど前は、一度聞いた声や音楽をどこかに残して、後日にそれをもう一度聞きなおすということはできませんでした。1877年、日本では明治10年のこと、アメリカの発明王エジソンが蓄音機^{ちくおんき}を発明しました。その後、改良が重ねられ、より音質の良いものがつくられていきました。1915年（大正4年）にエジソンが行った実験は、本物の演奏と蓄音機の再生音と途中ですりかえるもので、聞いている人がわからないほどであったと伝わっています。

日本に蓄音機が入ってきたのは、エジソンが発明した翌年のことでしたが、当時はまだ試作品であり、実験の途中段階のものでした。一般的に楽しめるようになったのは、1927年（昭和2年）に欧米のレコード会社が日本向けのレコードを製作し始めたころからになります。この頃はまだ録音されたものを楽しむだけでした。

1901年（明治35年）にデンマークで開発されたテープ録音の技術が基礎になり、1950年（昭和25年）テープレコーダーが発売されました。これにより、録音されたものを楽しむだけでなく、自分の手で録音したものも楽しめるようになりました。1963年（昭和38年）、オランダで開発された録音・再生のできるカセットテープは画期的なものでした。その後さらに開発は進められ、それまでのレコードやテープなどがアナログ式であったものから、デジタル式による録音やコンパクトディスク（通称CD）盤の発売などにより、より高音質の録音を楽しむ事ができるようになりました。

現在では、デジタル式の機器やパソコンの活用などにより、CDを自分で作成したりすることもできるようになり、また、録音する媒体も、よりコンパクトで容量が大きく録音時間も長くといった性能の高いものが開発されてきているのです。





←初期の蓄音機（1887年）

1877年にエジソンが発明し、『音』を『記録する』という意味でフォノグラフ (*phonograph*) と名づけられました。これは銅製の円筒にスズ箔^{ほく}を巻いたレコードを手で回転させながら音を記録し、次に振動板^{しんどうばん}と針を変えて同じ方法で音を再生させる仕組みになっており、録音と再生の二つを備えたものでした。当初は蚊の鳴くほどにかぼそく、言葉もはっきりとは聞こえず、しかも5～6度の使用で取り替えなくてはならないものでした。



←ディスク型蓄音機（1907年）

レコードの主流であるディスクが本格的に出回り始めたのは1894年でした。当初は硬質ゴム^{こうしつ}を材料としていましたが、1897年からはシェラックを使用してプレスがより精巧・容易におこなわれるようになり、1900年にはワックスに録音する方法が発明されて、蓄音機とレコードの歴史に大きな影響を与えました。

写真は1904年にアメリカのコロンビア社から発売された『グラフォフォン』です。当時の蓄音機は、平円盤^{ひらえんばん}のターンテーブルを毎分78回転で動かすバネモーターと、音管（アームとラッパ）と雲母^{うんも}の振動板をもつサウンドボックスを主要な部品としていました。



↑コロンビア
Viva tonal Grafonola Model No.202
(1930年代)



↑サンキョー
Goldring (1930年代)

ケースの蓋を閉じ、持ち運べるポータブルタイプ。振動板で増幅された音をラッパではなく蓋で反射させ、音を鳴らしました。蓋の内側にはポータブル機らしく、レコード収納用のホルダーが設けられています。

印刷スル。

明治時代のなかばごろまで、日本では文章や絵などを複製する場合、手書きで写すか版木に彫って刷るしかなく、大変な時間や手間を必要としました。筆記具も毛筆が中心で、何枚もの文書を複製しなくてはならないときには、とても不便でした。

諸外国の政治や経済の手法を参考にして近代化が進められていくなかで、役所や企業などにおいて事務効率の向上は大きな改善点として意識されるようになりました。仕事で必要とする文書を複製するための手法が輸入されたり作られたりはしましたが、どれもめざましい効果を上げられるものではありませんでした。

このような状況のなか、日本に古来からある和紙の文化と染織の技術により発明されたのが^{とうしゃばん}謄写版で、1894年（明治27年）のことでした。和紙にロウをぬったものを原紙としてやすりの上にのせ、ここに^{てっぴつ}鉄筆で文字を書くことにより細かい孔を^{あな}うがつという謄写版のアイデアは、日本の伝統文化から生みだされた発明といえる技術です。

簡単に、そして正確に文字や絵をコピー複製することのできる謄写版は、官公庁や企業で使われるだけでなく、学校の教材作成や地域での事業などをはじめ、広く一般的につかわれるようになりました。

その後、この謄写版の技術を原理とした開発がすすみ、現在の役所や学校などでは感熱デジタルシステムによる製版・印刷一体型の謄写機に受け継がれていたり、家庭用としては1983年（昭和58年）にプリントゴッコ（理想科学工業）が発表され、新しい需要を生み出しています。

さらに、画期的な発明としてのワープロの登場、また最近ではパソコンの普及などにより、高度で複雑な技術を比較的容易に利用して文書などの複製をつくることができるようになったのです。





↑ 謄写版 (昭和時代)

特殊加工の紙や絹布、金属箔などに孔をあけ、その孔から印刷インキを紙などの面上に通過させる印刷様式を孔版といい、謄写版印刷は孔版印刷の代表的な印刷方法です。

日本では1894年(明治27年)堀井新治郎が、口をひいた原紙をやすり上におき、鉄筆で書いて製版する方法を発明しました。謄写版と名づけられたこの方法は、一般的な印刷法として広く普及していきます。

最初は手書きのものばかりでしたが、大正の末年ころからタイプライターが利用されはじめ、戦後になるとインキの発達などもあって鮮明で細かい印刷ができるようになり、印刷法としての地位を確立していったのです。

↓ 輪転謄写機 (昭和時代)



日本における輪転謄写機は、1910年(明治43年)堀井新治郎が製造したのが最初で、その後輸入品に刺激されて改良が重ねられ、主に官公庁や会社などに普及しました。

その使用法は、スクリーンを張った円筒に原紙を張り、円筒が回転することで印刷されるもので、インキは円筒の内側から供給されます。写真は手動式ですが、電動式では一分間に150枚程度の印刷ができました。

一時は各地に普及していた謄写機でしたが、コピー機やプリンターなど、より便利な印刷機の登場により、次第に姿を消しつつあります。

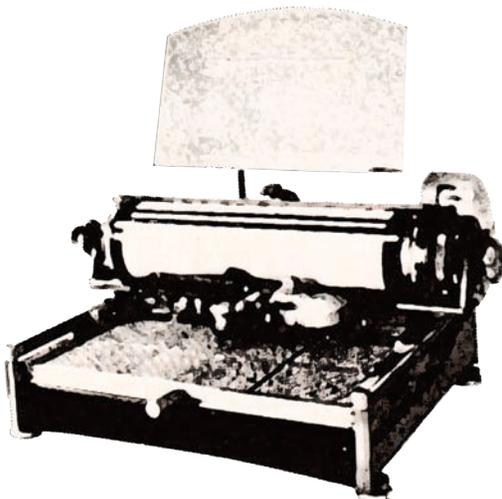
↓ タイプライター
SILVER-REED 720 (昭和時代)



手で書かれた文字は人によって違いがあり、判別がしにくいこともあります。しかしタイプライターによる印字は機械的におこなわれるため、活版印刷と同様の鮮明で読みやすい文章が得られます。特に欧文タイプライターは機構的に簡単だったこともあり、広く普及していきました。

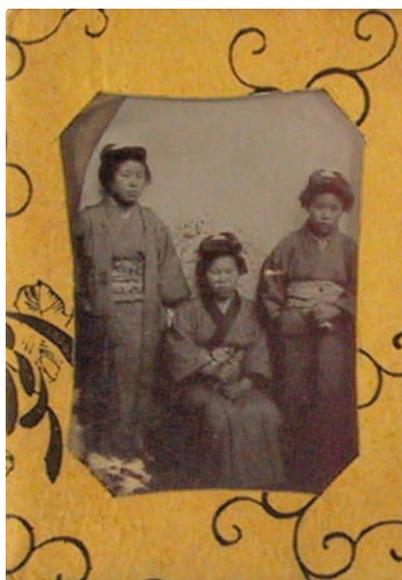
今回の展示品であるタイプライターは、シルバー精工製の手動式マニュアルタイプライターで、1966年(昭和41年)から1987年(昭和62年)の21年間に生産、約550万台が出荷されました。主に海外への輸出向けであり、日本国内にはわずかしか出回りませんでした。手動式であるため、電気資源に乏しい地域では現在でも使用されているとのこと。

← 和文タイプライター (1915年)



欧文タイプライターの発達に刺激され、1915年(大正4年)杉本京太によって発明されました。欧文では普通84種の活字でよいのに対し、和文は3000字に達する多数の活字を必要とするため、構造はかなり異なったものとなっています。写真は最初に発売されたもので、選ばれた2400文字は平面上の活字庫に分類し、独特の配列で整理して並べてあり、前後左右に動く一本のタイプバーによって打ちたい活字をつまみ上げ、円筒形の紙保持具に向かって打字するという斬新な機構をしていました。

ワープロやパソコンの普及するにしたがい、その姿を見ることは少なくなりましたが、戸籍関係の事務には現在でも使用されています。みなさんの戸籍謄本にも、和文タイプライターが使われています。



宮代町郷土資料館